

Ian Gillan Interview 2007

聞き手、構成、文：南 陽一郎

イアン・ギランは近年とても活発な活動ぶりを見せている。2005年にディープ・パープルの『Rapture of the Deep』がリリースされて以来、2006年には久々のソロ・アルバム『Gillan's Inn』をデュアルディスク仕様で発表。その後同アルバムのプロモーションの為、忙しいパープルのツアーの合間を縫ってソロとしては27年ぶりの北米ツアーを敢行。今年に入ってからにはキャリアを総括した約六時間にも及ぶ二枚組DVD『Highway Star』をリリース。そして70年代のイアン・ギラン・バンドから80年代のギラン時代までの作品が纏めてリマスターされる、といった具合だ。その間ずっとパープルのツアーまで続けているのだから、齢62歳にして益々精力的な活動を展開しているイアンなのである。今回のインタビューではそんなイアンの近況にスポットを当ててみた。それと個人的な話で恐縮だが、私には1978年以来ずっとイアンに訊いてみたかった事が一つある。このインタビューはそんな私にやっとその機会を与えてくれる事になった。それではここにイアン・ギランとの最新インタビューをお届けしよう。

近況

— イアン、本日はヴァカンスを楽しんでいらっしゃるそうですね？ それなのにインタビューに応じて頂いて、誠に恐縮の限りです。

イアン・ギラン（以下IG）： いや、本当に気にしないでくれよ。今家族でポルトガルに来てるんだ。リフレッシュして気分も最高さ。

— それは素晴らしいですね。欧州ツアーも素晴らしかったと聞いていますが？

IG: ああ、お陰さまで。もう驚異的としか言い様がない。あれ以上良いツアーなんて想像出来ないし、何もかもが常に良くなってるんだ。観衆は最高だし、会場はでかくなるし、公演日数も増える一方で、とにかくファンタスティックだ。まだ駆け出しの頃はツアーの日程表を見て、ああ、今週はギグが一回入ってるぞ、それから又来週に一回入ってるな、って感じだね。だから今の状況は本当に素晴らしいよ。それにオーディエンスも信じられない位最高なんだ。17, 8歳の若者達が沢山観に来てくれる。彼らの存在がショウにより活力を与えてくれるんだよ。

— 凄い話ですね。その勢いで北米ツアーがより素晴らしいものとなってくれば、と思います。今回のツアーではここ数年公演の行なわれなかったフロリダでもギグが予定されていますね。

IG: ああ、プロとしてはギグをやってなかったね、確かに。

— そういう訳でセットリストなどは欧州とは違ったものになるとか、ございますか？

IG: セットリストか、... 分からないなあ、まだそれに関しては相談してないからねえ。でも余り俺達のショウにおいては余り... ま、普段と同様のものになるんじゃないかな。実

際オーディエンスの反応にもよるけれど、正直アメリカでこういったオーディエンスが俺達を待ってるのか良く分からないんだ。でもヨーロッパのオーディエンスと同様の熱狂は期待していない。何が起こるか分からないんだよ。俺達はオーディエンスによって曲を替えるとかはしないけれど、パフォーマンスの大部分はインプロヴァイゼーションによるものだからさ。ディープ・パープルのツアーにおいて、セットリストは殆ど変化しないんだ。それでも毎晩の演奏時間には20分から30分の違いが出てくる。だからそこで何かが起こっているのは確かなんだ。それとね、俺はまだショーを観てない人達の前でセットリストについて話したくないな。間違った先入観を与えかねないからね。

— それは確かですね。でもしつこく一つだけ聞いてしまいますけど、ツアーを通して演奏されている“Things I Never Said”は何故『Rapture of the Deep』に収録されなかったのですか？

IG: え、何だって？ 入ってる筈だよ。

— いや、私はこのアルバム発売されて直ぐに買ったのですが、北米盤には入っておらず、日本盤にボーナストラックとして入ってたんですよ。最近アメリカでも二枚組のツアーエディションが出てやっとそこに収録されたんです。

IG: そうなのかい？ いや、俺はどの曲がどれに入ってるとか、良く分かってないから。
(笑) そういえば最近俺の知らないところで新しいパープルのDVDが発売されたらしい。
(笑)

— (笑) いや、実は私はあの曲がアルバムの中でも特に気に入ってるんです。それでどうしてこれがボーナスになったのかお聞きしたかったんですよ。

IG: そうだったのか。俺もあれは気に入ってるんだ。八分の六拍子から四分の四拍子のスウィングに変わるリズムの転調がワンダフルだからね。とっても気の利いた変化だと思うんだ。ライブでもとても効果的だし、音楽的にもショーをスタートさせて雰囲気を出すには最適だ。実際最初の四、五曲くらいは間髪を入れずに連続でプレイするんだよ。息もつかせぬ勢いで連発するんだけど、とても効果的なんだ。

— これはロジャーにも言ったのですが、ここ12年ほどジョン・ロードの引退以外バンドの結束がとても固いものになったと感じているんです。これは長年来のファンにとっても歓迎すべき変化ですね。

IG: (笑) いや、俺達にとっても嬉しい変化さ(笑)。今日は一体どんな問題が起こるのかって毎日胃が捻られる様な思いをさせられてきたのは、俺の人生において最も腹の立つ事だった。角を曲がったらそこに何が待っているのか分からなかったんだ。今では振り向けばそこに友人達がいます。全員がとてもプロフェッショナルで、俺は彼らに多大なる敬意を抱いてもいる。ステージの上では何時でもチャレンジが待っているし、俺は皆のやってる事に尊敬の念を持って接する事が出来るんだ。それが俺を信じられない位最高の気分にしてくれるのさ。この安定感がディープ・パープルにルネッサンスを齎してくれたんだよ。

世界を股にかけた活動

— スティーヴが加入してからパープルはフロリダで幾つかのとても重要なギグを行なってきましたね。まずスティーヴのお披露目となったオーランドのショー、『Abandon』録音時にスタジオから抜け出して行なったハウス・オブ・ブルースでのギグ...

IG: そうだ、俺も覚えているよ、あのショウは。

— それからDVDにもなった2001年のサンライズ公演といった具合ですけど、貴方にとってフロリダとはどういう存在なのでしょう？ ま、これは私自身フロリダに住んでいるから、ってのもあるんですが。

IG: (笑)俺の友人がかつて「Make Florida Your Last Stop on Earth (人生の終わりはフロリダで過ごそう)」って曲を書いた(笑)。俺はフロリダで色々なものを見てきたんだ。マイアミは街自体が一新されたよね。それに俺はフロリダに沢山の友人がいるし、スティーヴ・モースも住んでるし。彼は自家用機を操縦していろんなところに飛んでくたろ。フロリダって土地は素晴らしいと思うよ。俺も南端はキーウエストから北部の殆どの都市まで何度も訪れた事がある。東海岸には大西洋があって西にいけばメキシコ湾がある。これ以上何を望めば良いんだ、ってくらい素晴らしい。君はどこに住んでるんだい？

— オーランド近郊です。

IG: オーランドか！ いいとこだねえ。俺もセントジョン・リヴァーをカヌーで下った事があるんだ。本当に多くの時をカヌーを漕ぎながらあの辺りの湖や川の上で過ごしたものだ。実にワンダフルだった。ある時なんかカヌーに乗ったままアルマジロと三時間も睨めっこしてた事もあるんだ！

— (笑)アルマジロは確かにこの辺にも良く出ますよ。話を交えますが、6月末にギリシャでオーケストラをバックにショウを行なわれると聞いていますが、これはどういういきさつで実現したのですか？

IG: 俺にも分からないんだよ！ 誰かがオフィスに電話してきたんだ。フリードマン・ライルっていうアレンジャーがいて、彼がディープ・パープルの曲をオーケストラ用にアレンジしたのを4、5年前にプラハにいる時に聴いたんだけど、それは素晴らしいものだった。彼はプラハのシンフォニー・オーケストラともコネがあって、以前にも何度かこのショウを実現させるつもりだった。けれど俺とオーケストラのスケジュールが合わなくて、ずっと出来なかったんだ。で今回、テッサロニッキ・ステイト・オーケストラとフェスティヴァルに出演する機会を与えられた彼は俺に連絡してきて、6月の終わりに公演の予定があるんだがそれに出られないかって打診してきた訳だ。俺も彼のアレンジを覚えていたし、それが如何に素晴らしいものであったかも良く分かっていたので、直ぐに承諾したよ。素晴らしい体験になると思うし、俺自身色々違った事にチャレンジするのが好きだからとても楽しめると思うんだ。それとね、この話がまとまって以来、スペインでもこのショウを上演してくれないかっていうオファーも貰っている。どうなるかはまだ分からないけれどね。この調子でいくと、これが俺の趣味になるかもしれない(笑)。

— なんとも趣味の良い話じゃないですか(笑)。

IG: そうだろ！(笑)

— 以前ルチアーノ・パヴァロッチィとも競演なされていますよね。もう完全にその世界に入り込んでるじゃあないですか。

IG: 信じられないだろ。あのルチアーノ・パヴァロッチィと一緒に“Nessus Dorma”を競演するなんて、本当に信じられない体験だよ。彼はとても寛大で親切な男なんだ。電話で俺が何を歌いたいか伝えると、彼から「え、何が歌いたんだって？ 君はファッキン・クレイジーか！」って言われた。(笑)

— (笑) あのパヴァロッチィがファッキン・クレイジーって言ったんですか？

IG: ああ、確かに！ 人は彼をクレイジーか天才かってよく言うけど、俺に言わせりゃ彼は間違いなく天才だ。 それにとてもいい人でもある。 何事にも常に楽しみながら取り組んでいく。 それとね、彼も俺もお互いの本分を良く理解し合ってるんだ。 彼はロックシンガーじゃないし、俺もオペラシンガーじゃない。 俺達がこれをやったのはあくまでチャリティの為さ。 サッカーをする時も同じだよ。 俺はプロじゃあないけれどサッカーをプレイするのは大好きだし、俺の英雄でありアイドルでもある名手ジョージ・ベストと一緒にチャリティの為によくプレイしたものさ。 (パヴァロッチィと) ステージに上がって歌ったのも、チャリティ基金を集める事が目的だった。 アフガニスタンとイラクの子供達の為に二回のベネフィット・ショーを開いたんだけど、素晴らしい体験だったねえ。 “Nessus Dorma” はロックバラードとして録音された事はまだ無いけれど、もしそうだったら最も偉大なロックバラードになるんじゃないかな。

40年のキャリアとギラン時代を振り返って

— 貴方の最新DVDである『Highway Star』は素晴らしいロック・ドキュメンタリーに仕上がっていますね。 それにしても40年以上の貴方のキャリアをたった六時間で二枚のDVDに凝縮するのはとても難しい作業だったと思うのですが、どうでしょう？

IG: ああ、確かに。 その賞賛はすべてプロデューサー達に向けられるべきだな。 彼らは素晴らしい仕事してくれた。 それだけじゃなくて、彼らはこれを纏めるに当たってファンの視点からではなく、あくまで一般の視聴者にも伝わる人間的興味を機軸として制作してくれたんだ。 観て貰うとそれはしっかり伝わってくると思う。 テレビでドキュメンタリーとして放映されても通用する事を目指して制作されたからね。 最高の仕上がりになったと思ってるよ。

— あのDVDで最も感動的だった場面の一つがイアン・ペイスの「俺達は何を差し置いてもまずシンガーを守っていくべきだった」という発言でした。

IG: (照れ臭そうに) ハハハ。

— 彼の言う様に、楽器は替えられても声はそういう訳にはいきませんからね。

IG: うん、分かってるよ。 でもねえ、あの頃俺達皆まだ若かったからさ。 若い時ってのはそういうのが見えないものだからね。 俺は俺のやり方を通したかったし、彼(リッチー)は彼のやり方を通したかった。 だから... そう、人生経験に勝るものはないんだ。 俺だってそうだけど、誰だって他人の言いなりになりたくないだろう。 リッチーに関して言えば、彼がああいう態度で接していたのは俺に対してだけじゃなかった、って事なんだ。 他のミュージシャン達にも、レインボウの時だってずっとそうだった。 彼は基本的に支配していかねば気がすまない傾向の人間で、それが彼の偽りない性格なんだ。 だから俺達の関係はパープルの初期を除いて結実する事は出来なかった。 俺はね、目の前にエンジンを垂らしてくれれば誰の為にでも走ってやるけど、突っつかれて言いなりになる事は絶対はない。 でもそれは誰だってそうなんじゃないかな？

— ええ、分かります。 話は変わりますが、貴方のキャリアにはパープル以外にもギランという重要な時代がありましたよね。 最近当時の作品がリマスターされて一斉に再発されましたが、これは80年代以前から貴方の活動を追っていたファンにとって素晴らしいニュースだと思うんです。 このリマスター、そしてギラン時代に関してお話しいただけますか？

IG: ああ、喜んで！ これはパープルの時にも同じ様に思ったんだけど、パープルのレコードは元々アナログで録音されてビニール盤でリリースされたものだった。 それがCDにコピー

されたのを聴いて涙が出そうになったよ、余りにも出来が悪くてね。アナログ盤をCDに変換するのならば、デジタルのフォーマットに見合ったマスタリングを施す必要があるんだ。ただコピーするだけじゃあアナログの音は上手くデジタルへと移行出来ない。CDの初期の頃、誰もがCDはレコードほど音が良くないって言ったけど、それはテクノロジーを適切に使っていなかったからなんだ。新しくデジタルで録音されたものは良かったんだが、昔のアナログ盤を適切にCDの移す事の出来る技術を持った人間は当時まだいなかった。ギランのレコードに関しても同じ事さ。ギラン・バンドが解散した1982年になるまでCDは店頭に並ぶ事すらなかったからね。その後ブラック・サバスに参加した時だって、レコーディングの際に念頭にあったのはLPとしてリリースする事だったし。CDはまだ浸透していなかったんだ。だから当時のアルバムがレコードで聴けたのと同じ音で再現できる様になったのは、実にファンタスティックな事だよ。それにこれをリリースしてくれたのがBBCの関連会社であるのも特別な事に感じている。彼らは昔のジャズ・レーベルであるブルーノートの作品が再リリースされた時みたいに、オリジナル盤の威厳を保つべくアルバムのジャケットを復刻するのにも細心の注意を払ってくれた。最初からCD向けに小さな紙を適当にデザインしたのとは訳が違うんだ。だからそういう事も含めて、俺は今回の再発リリースに心から満足しているし、嬉しく思ってるんだよ。

— さて、これだけのリリースの中から未だに当時の貴方の作品を聴いた事の無いリスナーに一枚推薦なさるとしたらどれになりますか？

IG: ハハハ (嬉しそうに)、うーん、そうだね。俺は昔からずっと『Double Trouble』が気に入っていたよ。

— それは嬉しいチョイスですね。実は私のフェイヴァリットも同じなのです。

IG: それはいい。あのアルバムはね、俺達が初めてしっかりしたプロデューサーを雇ってスタジオで制作したものなんだ。とってもいい勉強になった。最初は凄く嫌だったんだけど、それまで俺が自分でプロデュースしていたサウンドには持続性がないというか、長い間通用していくものではないっていうのが良く分かったんだ。だがそれ以上に、二枚目のライブ・サイドの最初にあるレディング・フェスティバルからの“No Laughing in Heaven”でオーディエンスが俺達を待ち構えているところを聴くと、今でも鳥肌が立ってくるんだよ。

— 昨年の貴方の北米におけるソロ・ツアーでもオープニングが“No Laughing in Heaven”でしたね。

IG: そうなんだ！ (笑) あのツアーではライブ・レコーディングもしたんだけど、さっきもそれを聴いてたところさ。昨夜それをリリースする契約を結んだばかりなんだよ！『Gillan's Inn』ツアーではロサンゼルスハウス・オブ・ブルースでのショウが録音・録画されたんだけど、そのコンサートを昨夜初めて聴いたばかりなんだ。エンジニアはニック・ブラゴーナが担当していて仕上がりも素晴らしいものになっている。DVDとしてもリリースされるんだ。

— いや、あのツアーではフロリダ公演が行なわれなかったの、私もリリースを楽しみにしています。

IG: ああ、フロリダには行けなかったからね。

— さて、そろそろ時間切れになってきましたので最後の質問です。1978年にそれまでのイアン・ギラン・バンドを解散し、スティーヴ・バードとジョン・マッコイ達を迎えた新バンド、ギランとして貴方は再スタートを切りましたけれど、その最初の仕事が秋の日本公演でしたね。

IG: ああ、そうだったなあ。

— 私は東京公演で最前列にいたのですが、あの時の貴方の目に一抹の寂しさというか虚無感が漂っていた様に思えたんです。あれは私の考えすぎだったのか、それとも当時の貴方の心境を表したものであったのか、とずっと疑問に思っていたんですが. . .。

IG: . . . 1978年か. . . 正直に言おう。(苦笑)あの時俺の心はそこになかった。当時の俺は何事にもスリルを感じる事が出来なくて、常に混乱しているような気分だった。知ってると思うけど俺は数年間音楽業界から身を離してて、まだ戻ってきたばかりで自分が何をしたらいいのか良く分からなかったんだ。それにしても(苦笑)良く見ていたね、君も。鋭い観察力だ(笑)。

— いや、長年の疑問が解明されて私も満足です。イアン、今日は本当に有難うございました。楽しかったですよ。

IG: 俺もさ。是非フロリダで会いに来てくれよ！